

Englische Suiten

Johann Sebastian Bach

J.S. バッハ 六つのイギリス組曲より

第3番 ト短調 BWV808

プレリュード (*Prélude*)

アルマンド (*Allemande*)

クーラント (*Courante*)

サラバンド、同じサラバンドの装飾
(*Sarabande, Les agréments de la même Sarabande*)

ガヴォット I アルテルナティヴマン
(*Gavotte I alternativement*)

ガヴォット II またはミュゼット
(*Gavotte II ou la Musette*)

ジーク (*Gigue*)

解説付き

●イギリス組曲について

「イギリス組曲」は、「フランス組曲」「パルティータ」と共に、バッハの代表的な鍵盤楽器のための組曲です。いつ作曲されたか、正確なところは分かりませんが、「パルティータ」が最も遅くライプツィヒ時代<38～65才>(1723-1750)の作曲。「フランス組曲」と「イギリス組曲」は、ワイマール時代<23～32才>(1708-1717)の終わりからケーテン時代<32～38才>(1717-1723)にかけてまとめられたもので、作曲もその頃と考えられます。「イギリス組曲」は様式的に見て、「フランス組曲」より早い時期、1722年(一説には1715年頃)の作品だろうと言われています。

名称の由来ははっきりしていませんが、「ある高貴なイギリス人のために書かれた」ためにイギリス組曲と呼ばれるようになったなどの説があります。

6つの組曲からなっており、それぞれ6つの曲を持っています。そして、6つの組曲とも「プレリュード」で始まり、そのあと、「アルマンド」「クーラント」「サラバンド」「ジグ」が続き、「サラバンド」と「ジグ」の間に第1番と第2番は「ブーレ」、第3番と第6番では「ガヴォット」、第4番では「メヌエット」、第5番は「パスピエ」が挿入されています。

●第3番 ト短調 BWV808

ケラーの言葉。「バッハの最も堂々たる楽章をいくつか含んでいる。すなわち、誇らしげで力のこもったプレリュード、オルガンのためのト短調ファンタジーに似た独創的なエンハルモニックをもったひどく激情的なサラバンド -- このサラバンドはバッハの全ての組曲中無類のもので、予備のない掛留やデクラメーション的なバスをもったその変奏に入ると、主要楽節の不協和音的性格をさらに尖鋭化するのである -- その対比として魅力的な「ミュゼット」を伴う男性的なガヴォット、そして嵐のような動きのジグなどがそれである。いずれも、ヘンデルを通じてよく知られたバロック的ト短調パトスの、まことにバッハらしい造形である。」

第3番は、プレリュード - アルマンド - クーラント - 変奏をとまなうサラバンド - 二つのガヴォット - ジグ の構成となっています。

プレリュード (Prélude)

「誇らしげで力のこもったプレリュード」の表現通り213小節に及ぶ長大な前奏曲です。リトルネロ形式 -- 主要楽節が副楽節を挟んで何度も回帰する協奏曲楽章。曲の冒頭の5～33小節が、曲の最後185～213小節に再現され、その間は転調しながら主要楽節が副楽節を挟んで展開します。ヘンレ版でスラー表記されているのは、29, 30小節と209, 210小節のみですが、明らかにフレーズ表記して良いと思う箇所には、スラーをつけておきました。演奏の参考にして頂けましたら幸いです。

Englische Suiten

Suite III

Johann Sebastian Bach
BWV 808

Prélude Allegro

The musical score for the Prélude of Suite III in G major, BWV 808, is presented in a grand staff format. It begins with a treble clef and a key signature of one sharp (F#). The tempo is marked 'Allegro'. The piece starts with a mezzo-forte (*mf*) dynamic and features a variety of textures, including arpeggiated chords and sixteenth-note patterns. The score is divided into measures, with fingerings and articulation marks clearly indicated. Dynamics range from mezzo-forte (*mf*) to forte (*f*), with crescendos and decrescendos. The piece concludes with a decrescendo (*dim.*) and a piano (*p*) dynamic.